岩波講座
日本文学史 第十一巻 近代

近代俳句

山本健吉

岩波書店

近代俳句

山本健吉

月並派の人々

正岡子規の俳句革新運動は、明治二十五年(一八九二)ごろから始まるが、その後も久しいあいだ、点料で生活している旧派宗匠の勢力は衰えなかった。明治三十二年(一八九九)六月に、雑誌『太陽』で「俳諧十二傑」の投票を発表したが、それは当時の俳壇の勢力分布を物語るものであろう。十二傑の氏名は左の通りであった。

老鼠堂永機(文政六年—明治三七年 一八二三—一九〇四)　正岡子規(慶応三年—明治三五年 一八六七—一九〇二)　春秋庵幹雄(文政一二年—明治四三年 一八二九—一九一〇)
尾崎紅葉(慶応三年—明治三六年 一八六七—一九〇三)　花の本聴秋(嘉永四年—昭和七年 一八五一—一九三二)　角田竹冷(安政三年—大正八年 一八五六—一九一九)
巌谷小波(明治三年—昭和八年 一八七〇—一九三三)　雪中庵雀志(嘉永四年—明治四一年 一八五一—一九〇八)　大野洒竹(明治五年—大正二年 一八七二—一九一三)
幸堂得知(万延元年—大正二年 一八六〇—一九一三)　内藤鳴雪(弘化四年—大正一五年 一八四七—一九二六)　桂花園桂花(天保元年—明治三二年 一八三〇—一八九九)

この十二人のうち、永機・幹雄・聴秋・雀志・桂花の五人が旧派に属し、その他は秋声会三人(紅葉・小波・竹冷)、筑波会一人(洒竹、ただし洒竹は秋声会にも出席した)、根岸派(子規の根岸派でなく、篁村・三昧・露伴等文人のグループ)一人(得知)で、子規派はわずかに子規・鳴雪の二人を数えるにすぎない。紅葉・小波・得知等は、その文人としての名声から、その余技としての俳句が買われたのだと思われるが、それにしても、旧派五、中間派五、新派二という比率は、今日から見れば不思議な気がするくらいである。

明治の俳句革新は、言ってみれば、書生たちの、書生たちへの呼びかけによる、書生調俳句の制覇であった。これは文学・芸術の他の部門——すなわち小説・詩歌・演劇・美術などの分野における改良運動、あるいは近代化運動が、書生たちの主唱による運動であったのと規を一にするが、庶民たちの生活に根づよく滲透し、彼等からの点料で生活している宗匠たちの組織網が堅固であった俳諧の世界は、夜明けがいちばん遅く到来した。小説では坪内逍遙(安政六年—昭和一〇年 一八五九—一九三五)の「当世書生気質」によって、書生の生態を活写することによって新しい世紀に入ったのだが、書生

とは当時の大学生あるいは大学卒業の学士たちを主とする階層であり、新しく形成された若い知識層である。

月並俳句の批判は、子規の俳論の中で、写生の唱導と裏表の関係に立っている。月並または月次とは、宗匠たちが開く毎月の例会を意味したが、子規が月並俳句を平凡・陳腐・卑俗として攻撃してから、それは一般的に平俗で創意のないことの代用語となった。月並俳句の特色として、彼は「俳句問答」の中で、新派俳句と比較しながら次のような点を挙げている。

一、我は直接に感情に訴へんと欲し、彼は往々知識に訴へんと欲す。

二、我は意匠の陳腐なるを嫌へども、彼は意匠の陳腐を嫌ふこと我よりも少し、寧ろ彼は陳腐を好み新奇を嫌ふ傾向あり。

三、我は言語の懈弛(たるみ)を嫌ひ、彼は言語の懈弛を嫌ふ事我よりも少し、寧ろ彼は懈弛を好み緊密を嫌ふ傾向あり。

四、我は音調の調和する限りに於て雅語、俗語、漢語、洋語を嫌はず、彼は洋語を排斥し、漢語は自己が用ゐなれたる狭き範囲を出づべからずとし、雅語も多くは用ゐず。

五、我に俳諧の系統無く又流派無し、彼は俳諧の系統と流派とを有し、且つ之あるが為に特殊の光栄ありと自信せるが如し。従つて其派の開祖及び其伝統を受けたる人には特別の尊敬を表し、且つ其人等の著作を無比の価値あるものとす。我はある俳人を尊敬することあれども、そは其著作の佳なるが為なり。されども尊敬を表する俳人の著作といへども、佳なる者と佳ならざる者とあり。正当に言へば我は其人を尊敬せずして其著作を尊敬するなり。故に我は多くの反対せる流派に於て、佳句を認め又悪句を認む。

このうち、一から四までは、俳句の内容表現に関する相違を言い、ことに第一の点は、子規も「根底の相違」と言っているところで、五は宗匠の偶像崇拝的な傾向への批判を含む。天保の梅室・蒼虬(そうきゅう)等の流れをくむ俗調であり、社会現象として以上に価値のあるものではない。だが俳句の強みは、今日といえども、社会現象として何処までも生き

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

得るという不死身にあるのであって、子規の革新運動も、日本の土地に土俗化し、風化した俳句の世界に、渾身の力をこめて風穴をあけたようなものであった。ここに当時の代表的な宗匠の作例を挙げて、それがどのようなものであったかの参考に供しよう。

夕桜惜まれぬ身にふりかゝる　老鼠堂永機
手も足も隙のあきけり蚊帳の中　春秋庵幹雄
卯の花の雪皤をかゝぐる女あり（延宝調）　〃
空に路あとこそ見えね不如帰　〃
ほとゝぎす此大空に音のあまる　雪中庵雀志
倒れんとしてどつこいしよ案山子哉　花の本聴秋
見るよりも仰ぐものなりけふの月　〃
砕けても〳〵あり水の月　〃

この明治初頭の四大家のなかでは、京都にあった花の本聴秋が、もっとも俗耳に入りやすい俗調を持っており、老鼠堂永機がそのなかでもまだ採るべきものがあったと言うべきであろうか。もっとも、どちらにしても五十歩百歩で、論ずるに足りない。

中間派の人々

子規とは別に、やはり旧派とは関係なく興った二、三の流派について、一瞥しておこう。先にかかげた十二傑の表を見ても、秋声会の人たちの名が多数挙っているが、その始まりは、明治十八年（一八八五）の『我楽多文庫』の結成にあった。尾崎紅葉・山田美妙（明治元年―明治四三年 一八六八―一九一〇）・石橋思案（慶応三年―昭和二年 一八六七―一九二七）等、当時大学予備門にあった文学愛好者たちが硯友社を組織し、小説・戯文・詩歌・都々逸・川柳・冠句附に至るまで同好者から募って、回覧雑誌をつくろうとしたものである。巌谷小波・広津柳浪（文久元年―昭和三年 一八六一―一九二八）・川上眉山（明治二年―明治四一年 一八六九―一九〇八）・江見水蔭（明治二年―昭和九年 一八六九―一九三四）・丸岡九華（慶応元年―昭和二年 一八六五―一九二七）等が続いて参加したが、戯作者的な筆のすさびが反響を呼ぶとともに、彼等の文学的自覚が高まって行ったのであって、もとより小説が目標であり、他の戯文・雑俳は余技であった。紅葉等の文名が高まった明

治二十三年(一八九〇)には、彼の主唱で紫吟社をおこし、小説の余技ではあったがかなり熱心に句をつくった。紅葉によれば、俳諧は実に観察が鋭く、寸句で非常に力の強い言い廻しをするから、小説家としても学ぶべきで、移して文章を煉るに適すると考えられた。彼は小説を西鶴に学んだように、俳句を談林調や江戸風に学び、着想は人事の興味が勝っていて、小説的趣向を好み、洒落やうがちをしりぞけなかった。作例がないような難題が彼等のあいだでは好まれ、ことに俳席における紅葉の苦吟・推敲は有名であった。子規派が主として伊豫出身の田舎書生であったのに対して、彼等は同じ書生でも江戸生まれであり、趣味的にあく抜けがしていたと言える。子規ほどの革新の意気に燃えていなかったのも、かならずしも小説で名をなした人たちの余技であったからばかりでなく、彼等の気質が革新にまで足を踏み入れさせなかったからである。

明治二十八年(一八九五)十月、紅葉は角田竹冷とはかって秋声会を結び、小波・眉山・洒竹等の外、伊藤松宇(安政六年—昭和一八年 一八五九—一九四三)・鵜沢四丁・森無黄・川村黄雨・滝川愚仏・贄川他石(明治元年—昭和一〇年 一八六八—一九三五)などが参加した。洒竹がまだ学生服で参加したことを除けば、裁判官・弁護士・作家など、すでに職を持った紳士が多かったので、書生くさい根岸派とはまったく違った特色を持ち、旧派の俳人といえども無下に排斥しなかった。一城一国の主が多く、子規のような中心的な統率者がなかったから、特色はさまざまだったが、遊俳的な傾向が強かった。竹冷・洒竹・松宇等は、作家としてより、古俳書の収集家として聞こえている。

これより先、二十七年大野洒竹が首唱者となり、東大関係者だけで筑波会をつくり、田岡嶺雲(明治三年—大正元年 一八七〇—一九一二)・佐々醒雪(明治五年—大正六年 一八七二—一九一七)・笹川臨風(明治三年—昭和一四年 一八七〇—一九四九)・沼波瓊音(明治一〇年—昭和二年 一八七七—一九二七)・大町桂月(明治二年—大正一四年 一八六九—一九二五)等がこれに参加した。大学派とも言われ、俳諧研究の方面に業績があった。

またそれより古く、明治二十四年(一八九一)に伊藤松宇が首唱者となって、椎の友社を数人の同好と結び、子規・鳴雪等もこれに加盟していたことがあり、二十六年に、雑誌『俳諧』を発行したのが、新派俳句雑誌の始めとされて

いるが、二十七年ごろは自然消滅した。

以上の諸派の中では、紅葉の例句を挙げておけば十分であろう。書生派の子規に対して、通人派を代表する作風である。

吾背子の来べき宵なり玉子酒　　蚊帳の月美人の膝を閑却す
揉瓜や四十男の酒を妻　　水涕に裂くや逢ふ夜の緋縮緬
時鳥啼くや伏屋の受験生　　縁きりて帰る夜更けぬ川千鳥

子規の第一歩

明治の俳句革新運動は、その中心人物である子規の強い個性によって、かなりまで染め上げられている。

子規の父隼太は、松山藩御馬廻加番であり、祖父は藩のお茶坊主で連歌をたしなんだ。父の早世の後、母大原氏に養われ、外祖父の藩儒大原観山に漢学を学んだ。軍談や稗史小説を好んだが、松山中学在学中、友人たちと同親吟会という漢詩の会をつくり、河東静渓の添削を受けた。

明治十五、六年、十六、七歳のころ、彼は政治家たろうと志し、自由民権思想の影響を受けて、同窓生たちとしばしば演説会を開いた。伊豫が後に近代俳句のメッカと言われたように、隣国の土佐は自由民権運動のメッカであり、伊豫にもその影響が波及すること大きかった。松山中学初代の校長で、海南新聞主筆の草間時福や、県令の岩村高俊が、先頭に立って政治演説をやり、子規等も学業を放擲して演説に熱中し、「自由何クニカアル」「天将ニ黒塊ヲ現サントス」等の演題で、自由民権思想を論じ、監督から弁士中止を命ぜられたこともあった。

この演説熱も、後輩の高浜虚子（明治七年―一八七四―）が松山中学の初級にあったころまで続き、虚子もそのころは、演説会を開いて大いに天下国家を論じていたが、上級に上ったころは、そういう政治熱はさめてしまったという。つまり、明

治二十二年(一八八九)に憲法が発布され、それまでに全国を席捲した自由民権運動は、幻影にもせよ外観においては目的を達して、運動は挫折してしまったからである。子規と、子規の俳句革新運動に集まった青年たちとは、年齢的に七、八歳をへだてるに過ぎないが、はっきりと世代の断層を示しているのである。それは、明治二十二年の憲法発布の前に青年時代の自己形成期を経ていたものと、そうでないものとのあいだの決定的な相違である。渋川玄耳(明治五年—大正一五年 一八七二—一九二六)が、後に虚子の自伝的小説である「俳諧師」の批評を書いたとき、「憲法発布前後に中学時代を過した幾万のぐうたら人種」という言葉で、主人公の三蔵に対する自分の共鳴を述べている。言わば虚子や玄耳は、「アプレ憲法発布族」とも言うべき世代の青年であり、青年の政治運動熱の冷却、言いかえれば理想の喪失の時代の子であり、自由民権思想に熱を燃やした二葉亭・子規・透谷などと、明かに一線を劃する。子規が唱導した俳句革新運動が、どのような層に受け容れられたかということは、一考しておいてよいのである。

明治十六年(一八八三)五月、子規は東京にあった母方の叔父加藤恒忠の書に接して、ただちに中学を退き、須田学舎・共立学校、つづいて大学予備門に入学した。母方の親戚藤野家にしばらく在って、従弟の藤野古白(明治四年—明治二八年 一八七一—一八九五)ともこのころから親しみ出している。大学予備門では、夏目漱石(慶応三年—大正五年 一八六七—一九一六)等と知った。上京した当時は、大政治家になることを志していたが、十八年ごろは哲学を目的とすることを考えるに到った。詩文をつくることは、少年時代から彼の嗜好に合っていたが、やはり二葉亭と同じように、男子一生の目的とするには足らぬと思っていたわけで、天下国家の経綸から人生の哲理の究明に、志望を屈折せしめてからでも、文学をやることは趣味として以上に考えていなかった。十八年に帰省したとき、井手真棹に和歌を問い、二十年に帰省したとき、三津浜の大原其戎に俳諧を問うているが、いずれも彼の文学観を深めるのに役立ったとは思われない。

二十二年ごろには、彼の哲学志望が一転して、審美学に興味が向っている。これは彼の目的を文学趣味に一歩近づけたわけだが、同時に、逍遙・二葉亭・紅葉・露伴等の輩出の時期に際会して、小説類を耽読することはますます多

くなり、ことに露伴の「風流仏」には感嘆して、小説を試みてみようと思い、明治二十四年十二月から翌年二月にかけ、「月の都」を書き上げ、その草稿を持って谷中の露伴を訪れた。だが露伴の認むるところとならず、小説家志望を断念し、その年五月、虚子への手紙には、「僕は小説家となるを欲せず、詩人とならんことを欲す」と言っている。詩人とはまず、この場合は短詩型の詩人、つまり俳句作家たることであった。

このように、子規が俳句作家となったのは、政治家・哲学者・小説家等になろうとする志望の、断念の上に立ってのことだったのである。小説から俳句へ転向するに際して、彼は「人間よりは花鳥風月がすき也」(河東碧梧桐宛書簡明治二十五年五月二十八日付)と言い、また「天然の美、殊に花樹花草の美は何人も之を感ぜざるはあらず、予は特に之に応じ易き性あり」(「俳句の初歩」)と述べている。あの葡萄はすっぱいと言ったイソップの狐の言葉めいて、いささか滑稽だが、彼が自然詩人の天性を持っていたことも事実だろう。また「芭蕉が他の二子(西鶴・近松)と最も異なる所は人間を研究せずして自然を研究したる処に在り」(「松蘿玉液」)と言っている。これは、芭蕉が人間生活の万般を縦横に披瀝した連句に対して目をふさいだ偏見で、連句非文学説を唱えた子規としては当然の言葉であるが、同時にそれが子規の文学の限界でもあり、その後の俳句史の方向をも決定してしまったことは、否定できないのである。

常盤会寄宿舎に集まる人々

明治二十年(一八八七)十二月、子規は旧松山藩の給費生となり、旧藩主久松侯の経営している本郷真砂町の常盤会寄宿舎にはいった。この寄宿舎に、日本派の俳句革新運動前期を担った作家たちが、蝟集した観があり、此処が近代俳句の発祥の地だと言っても過言ではない。これより前、明治十八年ごろから、子規は句作をはじめていたが、二十年に帰省のおり、旧派宗匠の大原其戎に俳諧のことを問うたのでも分るように、彼の句境は多く月並俳諧を脱せず、二十二年に到っても天保俗調の「梅室句集」などを有難がっていた。だが、古俳諧を研究的に読んでいる点では子規

に並ぶ者はなく、自然に彼に感化されて、同好の士が彼の周囲に集まる形になったが、これは彼の性格がグループの大将にならなければおさまらない、負けず嫌いで、理論好きであった点も関係している。ところで、常盤会に集まった人たちは、すべて伊豫藩の子弟であったから、自然俳句グループも伊豫出身の人たちで固められ、子規派は後に伊豫派と言われたこともあった。

まず、二十二年(一八八九)四月には、詩文の好きな内藤鳴雪が舎監となってやって来た。子規と同室には新海非風(明治三年—明治三四年 一八七〇—一九〇一)があり、はじめは遊戯半分に、二人で俳句を作り始めた。その他寄宿舎生には、五百木飄亭(明治三年—昭和一二年 一八七〇—一九三七)・竹村黄塔(慶応元年—明治三四年 一八六五—一九〇一)・勝田明庵などがあり、従弟の文学青年藤野古白も俳句仲間に引き入れられ、舎監鳴雪はもっとも熱を入れた。二十三年二月十二日に、常盤会寄宿舎で第一回の「もみぢ会」を開き、課題を出し、和歌・俳諧・狂句・短文・戯画など種類を問わず作り合い、批評し合った。それを集めて「つゞれの錦」と名づけて回覧したが、七回分の会稿が現存している。紅葉等の『我楽多文庫』と似たような、文学書生のてんごう書きであるが、『我楽多文庫』があか抜けのした江戸っ子たちの遊びに出発したのに対して、これは田舎出の青年たちの不粋な集まりであったことが、対照的である。

その年五月には、松山の河東碧梧桐(明治六年—昭和一二年 一八七三—一九三七)が彼に手紙を出して俳句の指導を受け、同年七月には、帰省して三津浜で「もみぢ会」を開き、翌年五月には、松山の高浜虚子も書を寄せて、俳句の指導を受けた。当時子規の目標は、小説にあって俳句にはなかったとは言え、彼の俳句についての蘊蓄が、自然に俳句愛好の青年たちを周囲に集めるような形をとっていた。だが、まず貞徳調・天保調などからはいった子規は、かなり長いあいだ月並の俗調を脱することができなかったのに対して、全然そういう知識を持たないで俳句を作り出した青年たちは、月並調の拘束をもまぬがれていたから、その表現の新奇な点において、逆に子規が啓発されるようなこともあったのである。知らない者の盲蛇の強さであった。初期において古白・非風・飄亭、次いで碧梧桐・虚子が、新しい境地の句で、かえって

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

子規に影響を与えた。「虚栗」時代に、かえって其角が芭蕉を引きずったのと似ている。

藤野古白は、子規より五歳年少の従弟であったが、幼少から被害妄想症のところがあり、神経衰弱のため一時巣鴨精神病院に入院したこともあったが、二十四年、東京専門学校(早大の前身)に入学し、小説・戯曲の創作に志した。二十八年、ピストル自殺を遂げたが、力を籠めた大作戯曲「人柱築島由来」は、その年の『早稲田文学』に発表された。子規にすすめられて俳句を試みたが、それほど俳句に熱中したわけでもないのに、始終子規を競争者と見なしていたらしく、二十四年に俳句句合数十句を作ったときは、「趣向も句法も新しく且つ趣味の深きこと当時に在りては破天荒ともいふべく余等儕輩を驚かせり」(「藤野古白」)と子規は書いている。なお、当時の古白の句は「明治俳句界の啓明と目すべき者」であり、「年少の古白に凌駕せられたる余等はこゝに始めて夢の醒めたるが如く漸く俳句の精神を窺ふを得たりき。俳句界是より進歩し初めたり」(同)とも言っている。

古白の句には、次のようなものがある。

元日や夜に入りしより女声　　高燈籠枯葉と共に卸しけり

傀儡師日暮れて帰る羅生門　　今朝見れば淋しかりし夜の間の一葉かな

のどけさや五器に飯ある乞食小屋　　芭蕉破れて先住の発句秋の風

八月や月になる夜を寝てしまひ　　秋海棠朽木の露に咲きにけり

ことにこの最後の三句は、子規を驚かせたものであり、全体として、当時の平板な子規の句に較べれば、詩人肌で、ロマンチックな香りがあり、感覚的にも鋭く、近代味を帯びていたと言えるだろう。だが、「二十七年の頃より彼は却て月並調を学びて些細の穿ちなどを好むに至り、其俳句は全く価値を失ひたり。一躍して俳句の堂に上りし古白は苦辛して俳句の堂を下りたり。其発達の不規則なること此の如し」(同)と子規は言っている。それは月並調を知らなかった古白の落し穴でもあったが、そのころ小説や戯曲への野心に燃えていた古白に、俳句のような小文芸は眼中にな

かったと言う方が確かだろう。虚子は小説「俳諧師」の中で、古白をモデルにした篠田水月について、自殺する前、「三、四年間殆ど俳人としての交通を絶つてゐた」と書いている。

同じく「俳諧師」の中で活躍する五十嵐十風は、古白と並んで初期の子規派の異才であった新海非風がモデルとなっている。この小説によれば、彼は江田島の海軍兵学校を肺病のため退学して、文学の方に転じたので、「俳句を作り始めた頃は仲間中の第一の天才といはれ、小説を書いてもオリジナルな処があるといふ評判であつた。」常盤会寄宿舎で子規と同室になり、もっとも早く俳句を作り出したが、のち吉原の女郎を身受けして所帯を持った。そういう私行上から子規にうとまれたが、なかば棄てばちの生活で、最後はやはり、俳友たちと交際を絶ってしまって、失意のうちに死んだ。古白には子規が編した「古白遺稿」があるが、非風にはないので、子規派最初の選集である「新俳句」または「現代俳句集」(改造社版「現代日本文学全集」第三八編)を見るより外ない。

抱いて居る鶏も鳴きけり今朝の春　　時鳥中洲は雨に消えて行く

品川や海一面の雪濁り　　三日月や阿波の鳴門の波がしら

釣鐘に梅の影這ふ月夜かな　　鹿の声細谷川を飛んでけり

鶯や生麦村の四つ下り　　寒月や下町かけて塔の影

古白の句ほどロマンチックではないが、表現に円熟味があり、月並臭の抜けなかった子規の句と較べれば、清新でもある。子規が俳句への第一歩を印したころは、子規のような努力型の作家よりも、古白・非風のような直感的把握にすぐれている人たちの方が、句において成功していた。

五百木飄亭については、子規が後に、明治二十三、四年ごろに、自分の俳句がまだ俳句を成さず、月並のたるんだ句法を学んでいたときに、彼の句は独特の技倆を示して、簡勁緊密な句法を用いたことは、明治俳諧史上特筆すべきことで、自分が一題をとり、その題ばかりを形容して作ろうとし、陳腐な材料でその配合に多少の新意を出そうとし

ていたとき、彼は早くも二箇三箇四箇の材料を打ちこんだと言っている。これは飄亭が、当時すでに配合の方法を知っていたということである。例句を挙げれば、

国亡んで寺の正月僧もなし　　馬の首人の首行く菜種かな
柳一二家三四軒梅五六本　　裏店の雛物語小雨ふる
白魚や月の川尻上り来る

といった類いで、古白・非風に較べれば、別に驚くほどの詩想の持主ではないが、当時の子規にとっては、この程度の句の調子でも、「簡勁緊密」と言うに足りたのであろう。

俳句革新と俳句滅亡論

当時の子規の作例を示せば、次の如きものである。

茶の花や利休の像を床の上　（明治二十年）
青々と障子にうつるばせをかな　（明治二十一年）
一日の旅おもしろや萩の原　（明治二十二年）
あたゝかな雨がふるなり枯葎　（明治二十三年）
鶯や山をいづれば誕生寺　（明治二十四年）

いずれも虚子選の「子規句集」（岩波文庫版）から抜いたのだから、当時の子規の比較的ましな句であるが、わずかに「枯葎」の句にある情趣が認められるだけで、月並流の嫌味はないが幼稚である。古白・非風などの句に較べて、詩としてのひらめきが感ぜられない。だがさすがに、後年の写生への道を徐々に歩いていることは確かであり、ことに「枯葎」の句は写生による相当深い対象の把握にまで進んでいると言えるだろう。

まだ小説の創作に志していた子規ではあったが、周囲から俳句の指導者として見なされてくると、彼も自然古俳書を読み、研究し批判する態度を深めて来た。明治二十二年ごろはまだ月並調の影響下にあった彼も、二十三、四年には

次第にその影響から脱却しつつあったと見てよい。「もみぢ会」その他作句の機会も多く、旅行・吟行その他で写生的な訓練も深まって来たし、また始めから月並調を知らぬ青年たちの新境地が、子規を開眼せしめるきっかけとなったこともあった。二十四年の秋冬の交から、彼は一生の仕事となった「俳句分類」に着手した。毎日大学の図書館に通い、連歌の発句を書取り、季題別に分類して行く仕事であるが、昔の連歌時代から始まって、貞徳派の「無趣味なる滑稽時代」を過ぎ、談林に入って、「僅に一点の活気を認めながら猶五里霧中に迷ふてをる有様であつたが、『春の日』『あらの』など〻漸く佳境に入り始め、はじめて『猿蓑』を繙いた時には一句々々皆面白いやうに思はれて嬉しくてたまらなかつた」（「獺祭書屋俳句帖抄」序）という。そのころ別に「三傑集」（蓼太・曉台・闌更の句を集めたもの）の端本を持っていて、やや天明・寛政の句をのぞいてはいたが、「僅に蓼太の俗調を称讃せしに過ぎず」（「俳句の初歩」）といった程度で、天明調に目を開かれていたわけではない。だが以上のことは、子規の俳句開眼に、「俳句分類」の仕事が如何に下地になっているかを証明するものであり、彼は古俳書を片っ端から読破することで、おのずから蕉風俳諧の卓抜さを納得するに到ったのである。もちろん、俗俳たちに偶像視されていた芭蕉の句を知らなかったはずはないが、彼は古俳諧のマッスの中に身を投げ入れることで、その厭うべき俗臭をいやというほど味わいつくし、同じく芭蕉の句でも、無差別に礼讃するのでなく、その佳なるものと俗なるものとを鑑別する批評眼を養いえたのであった。これは、月並を知らないことが幸して一時的に新風を発揮しえた古白・非風などと違って、偶然が幸した月並脱却でないだけに、もっと根の深い開眼であった。後に彼は、月並調について自分の経験から次のようなことを言っている。「自分の俳句が月並調に落ちては居ぬかと自分で疑はる〻が何としてよきものかと問ふ人あり。答へて云ふ、月並調に落ちんとするならば月並調に落つるがよし、月並調を恐る〻と云ふは善く月並調を知らぬ故なり、月並調は監獄の如く恐る可きものに非ず、一度其中に這入つて善くその内部を研究し而して後に娑婆に出でなば再陥る憂無かるべし、月並調を知らずして徒に月並調を恐る〻ものはいつの間にか月並調に陥り居る者少からず、試みに蒼虬梅室の句を読

め。」（『墨汁一滴』）

明治二十五年（一八九二）六月から十月へかけて、『日本』新聞に「獺祭書屋俳話」を連載し出したが、これが子規の俳句革新運動の第一声となった。この年二月、小説「月の都」を執筆して、露伴に認められなかったことが、俳句に専念するきっかけとなった。『日本』新聞は彼の保護者の位置にもあった叔父加藤拓川の友人で、やはり同郷の人である陸羯南（安政四年―明治四〇年 一八五七―一九〇七）が主筆であった関係から、無名ではあったがその郷党のあいだではようやく重きをなしていた子規に執筆せしめたものであった。

「獺祭書屋俳話」には、子規が「俳句分類」の仕事を通して会得した古俳諧の蘊蓄を、縦横に発揮したものであった。もともと随筆的の著作だから、系統だてて執筆したものではないが、後単行本として出版するに当って、前後の錯綜を正し、俳諧史・俳諧論・俳人俳句・俳書批評の順序に再編集できるだけの、内容の豊富さを持っていた。まず「俳諧という名称」「連歌と俳諧」より説き起して元禄に至るまでの歴史を述べ、俳句の前途を卜し、新題目是非の論を述べ、和歌と俳句の差別について語り、また其角・嵐雪・去来・丈草・支考・野坡等の蕉風俳人、あるいは女流俳人について論じ、最後に「俳諧塵の栞」（撫松庵兎裘）「発句作法指南」（其角堂機一）を批判して、旧派宗匠に対する攻撃の火蓋を切った。

この俳話は、たいへん読者の反響を呼び起したもので、読者はその堂々とはばかることなく所信を披瀝する啓蒙的見解に、始めて眼の開くような感じを味わったのである。ここではすでに、俳諧・発句の言葉の外に、俳句という言葉を用いてあるが、発句を俳句と言った例は、子規が最初でないにしても、それは子規によって一般化された言葉であり、連歌の発句が独立して、全く単独のものとして意識されるようになったのは、子規以後に属する。この俳話の中で、「芭蕉は発句のみならず俳諧連歌にも一様に力を尽し、其門弟の如きも猶其遺訓を守りしが、後世に至りては単に十七文字の発句を重んじ、俳諧連歌は僅に其附属物として存するの傾向あるが如し」と言い、暗に発句だけを切

りはなした文学運動を押進めようとする彼の志向を、物語っているかのようである。

だがこの「獺祭書屋俳話」において、もっとも注目すべきものは、子規が俳句滅亡論を唱えながら、あえて俳句の革新に突き進んだことであろう。「俳句の前途」の項に、彼は次のように言っている。

数学を修めたる今時の学者は云ふ。日本の和歌俳句の如きは一首の字音僅に二三十に過ぎざれば、之を錯列法（パーミュテーション）に由て算するも其数に限りあるを知るべきなり。語を換へて之をいはゞ和歌（重に短歌をいふ）俳句は早晩其限りに達して、最早此上に一首の新しきものだに作り得べからざるに至るべしと。世の数理を解せぬ人はいと之をいぶかしき説に思ひ、何でふさる事のあるべきや、和歌といひ俳句といふ、もと無数にしていつまでも尽くることなかるべし。古より今に至るまで幾千万の和歌俳句ありとも皆其趣を異にするを見ても知り得べき筈なるに抔云ふなり。然れども後説はもと推理に疎き我邦在来の文人の誤謬にして敢て取るに足らず。其実和歌も俳句も正に其死期に近づきつゝある者なり。試みに見よ、古往今来吟詠せし所の幾万の和歌俳句は一見其面目を異にするが如しといへども、細かに之を観、広く之を比ぶれば其類似せる者真に幾何ぞや。弟子は師より脱化し来り、後輩は先哲より剽竊し去りて作為せる者、比々皆是れなり。其中に就きて石を化して玉と為すの工夫ある者は之を巧とし、糞土の中よりうじ虫を摑み来る者は之を拙とするのみ。而して世の下るに従ひ平凡宗匠、平凡歌人のみ多く現はるゝは罪其人に在りとはいへ、一は和歌又は俳句其物の区域の狭隘なるによらずんばあらざるなり。人問ふて云ふ。さらば和歌俳句の運命は何れの時にか窮まると。対へて云ふ。其窮り尽すの時は固より之を知るべからずといへども、概言すれば、俳句は已に尽きたりと思ふなり。よし未だ尽きずとするも明治年間に尽きんこと期して待つべきなり。和歌は其字数俳句よりも更に多きを以て数理上より算出したる定数も亦遙かに俳句の上にありといへども、実際和歌に用ふる所の言語は雅言のみにして其数甚だ少なき故に其区域も俳句に比して更に狭隘なり。故に和歌は明治已前に於て略ゝ尽きたらんかと思惟するなり。（傍点筆者）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com